

還ってきた「平和の像」と、突然出現したもう一つの像

池永記代美 (ベルリン・女の会)

芸術家招待プログラムに招かれた「平和の像」

頬を刺す冷たい風に乗って響き渡る太鼓の音が、「平和の像」の帰還を告げました。2020年秋、ベルリンの韓国系市民団体「コリア協議会」がベルリン市ミッテ区に設置した「平和の像」が行政当局により強制撤去されたのは、2025年10月のこと(『wamだより』vol.61参照)。それから約3ヵ月後の1月22日、同じくミッテ区にあり、元の立地から150メートルほどしか離れていない「芸術・都市学センター(ZK/U)」の敷地に、「平和の像」アリが戻ってきたのです。

ZK/Uは公共空間のデザインを考察し、対話の手段としてのアートを研究する芸術家集団「KUNSTrePUBLIK」が運営



ZK/Uの前庭に置かれたアリ。「私たちはみんなアリ」というスローガンで行われた除幕式では、アリの仮面をかぶった参加者たちが、記念撮影を行なった。

するセンターです。2012年の開設以来、世界各地から招待した芸術家や都市学研究者に活動の拠点を提供すると共に、様々な展示やイベントを行い、地元地域との交流も深めてきました。像の設置から撤去までの議論を身近で追ってきたZK/Uは、誰でも

自由にアクセスできる対話の場を提供するために、招待プログラムの一環として1年間アリを引き受けることにしたそうです。

太鼓の演奏で始まった除幕式で、ZK/Uのフィリップ・ホルストさんは、「私たちは現在、13人の招待客にスタジオを提供していますが、像が設置された場所に14番目のスタジオができました。これはみんなのものです」と挨拶しました。実際に同センターのホームページ上で、イランやモロッコ、スーダンなどから招待されたゲストと並んでアリも紹介されています。ZK/Uは、場や人々の語り、政治的現状の相互作用の中で、記憶は絶えず再形成されると捉えていて、アリを巡って多様な視点から意見が交わされることを望んでいます。ただし、ZK/U自身は政治的主体や像の代弁者ではなく、ホスト役に徹すると明言しています。

ZK/Uの敷地は内陸港に隣接した貨物駅跡地の一部で、実はミッテ区からの借地です。公園を併設する広い敷地は柵で囲われていますが、入り口は24時間開いていて、誰でも自由に入出りできます。公有地ともみなせるこの敷地へのアリの引越しに、在独日本大使館がどのように反応するか、大変気になります。

性暴力をテーマにした“普遍的”な像とは？

ところで、アリが撤去に脅かされていた昨年の9月9日、アリの所から2キロ程離れた同じくミッテ区の一角に「Petrified

Survivors (石と化したサバイバー)」という性暴力をテーマにしたもう一つの像が2年間の期間限定で設置されました。設置申請をした「紛争下の性暴力に反対する会(SASVIC)」は2024年6月にベルリンで設立されたばかりで、性暴力問題に取り組む既存の市民グループとも、地域住民ともつながりがなかったため、この像の出現は唐突でした。

幼児を背負った等身大の女性が、絞め殺しの木に絡み取られて身動きできなくなった様子を現しているこの像は、SASVICによると「世界で唯一、戦争や紛争下の性的暴力の全ての犠牲者とサバイバーに捧げられた」ものだそうです。像を制作したイギリス人彫刻家レベッカ・ホーキンスさんが、世界各地の性暴力のサバイバーや支援者組織の希望を反映して施した動植物のモチーフや刻んだ文字が、この像の普遍性を表していると言います。除幕式では、ミッテ区長やイスラム国兵士によるヤジディ教徒女性への性暴力を告発して2018年にノーベル平和賞を受賞したナディア・ムラドさんが挨拶をし、続いて行われたレセプションにはドイツ政府の女性閣僚も出席しました。華やかなスタートを切った像ですが、それ以降、注目を集めることはなく、ひっそり佇む姿は哀れみを覚えるほどです。

日本政府が、「平和の像」が表す歴史観は一方的だと非難してきた中で、「普遍的」で特定の国の犠牲者のためではないと謳う「石と化したサバイバー」像はアリの対抗馬のようにも思えます。ホーキンスさんは、ベトナム戦争に派遣された韓国軍兵士の性的暴力の犠牲になった女性を支援する団体のメンバーで、2019年には犠牲者を追悼する「母と子」という彫刻も完成させました。韓国兵の戦時性暴力を取り上げることで、日本軍「慰安婦」制度の犯罪性を相対化しようとする勢力がいることを思うと、ミッテ区にこの像が設置されたのは、単なる偶然ではないような気がします。

何はともあれ、これから1年、ミッテ区には2つの性暴力をテーマにした像が共存することになります。多文化社会ベル

リンで、誰が記憶・追悼され、誰がそのための場を公共空間に得るのか。アリが巻き起こした議論が、2つの像の共鳴により、さらに発展することを望みます。(写真はすべて筆者撮影)



「石と化したサバイバー」像。背後で縛られた手や縫い付けられた唇が痛々しいが、「女性と子どもは絡み合った根と共通の苦難によって結ばれており、2人は正義と癒しへの困難な道を歩むために共に前進しようとしている」(SASVICのHPより) そうだ。



日本軍「慰安婦」制度の犠牲者のために、「August 14 1991 Silence Broken」(1991年8月14日、沈黙は破られた)と刻まれているが、「虫眼鏡がないと読めないほど字は小さく、日本政府は気にしないだろう」とベルリンの地元紙はコメントした。